

であり、ICTAに重ねてこのような企画をすることは、ICTAを弱める効果があると思う。けれども、イギリスの連中はなかなか強気で、要求があるから聞くのだといった姿勢をくずさなかった。

会議のプログラムは約160件の一般講演の他に、ハンガリーのF. Paulikの併用技法の総合講演があり、地元のサルフォード大学のL. S. Barkが温度滴定について講演した。Paulikの講演の後で、彼に日本人の業績を全く引

用しなかったのは残念であったという。文献が手に入らないから、といていたが、ことさらに外したのではないにしても、関心がなかったように思われた。講演の内容は一篇2ページずつのextended abstracts集がProceedingsとして配布されたので、その中に日本の書店にも出まわらと思う。*プログラムその他についてご関心のある方は、私の手許にあるので、コピーを請求してほしい

第12回熱測定討論会報告

(電総研) 小 沢 丈 夫
(東大工) 山 内 繁

第12回熱測定討論会は昭和51年10月18日(月)より20日(水)まで名古屋大学工学部において開催された。一般講演は例年と同じく75件の参加をみたが、参加登録者は、208名と予想を下回った。丁度、名古屋が関東・関西の中間にあって交通の便は良いのであるが、地もとよりの参加が東京、大阪地区に比較して若干少な目であるのと、高分子学会が同時に名古屋大学で開催され、また、他学会も同じ時期に集中したために参加登録者数ではやや伸びなやみがみられたのであらうと思われる。

この他、外人講演を含めて特別講演5件、特別報告として、来年京都で開催予定の第5回国際熱分析会議の準備状況が、ICTA会長の神戸教授、ICTA-V組織委員長の関教授によって行なわれた。

本年度の討論会の運営においては、従来のような熱分析、熱測定による分類基準にかかわって、反応、非反応の分類を試験的に採用したのが最大の特徴であった。これにより、従来の熱測定、熱分析の枠をはずれて、両方の専門家が共通の討論の場を持てるようにとのねらいであった。

この分類はおおむね好評であったと思われ、次年度以降も継承されてゆくと思われるが、残念ながら、両会場で同じような物質の講演が重なってしまうプログラムが一部分にできてしまっており、プログラム作製段階で、もう少しゆきとどいた配慮が必要であつたと感じられた。

この点は次年度以降の宿題であらう。また、プログラム編成上で気の付いたことをもう一つ挙げれば、休憩時間を途中でとらなかつたため、特に午後にはかなり疲労を感じられる方が多かつたようである。この点も、プログラム編成時にもう少し配慮が必要であつたと反省している次第である。

本年度の一般講演について気の付いたことを二、三挙げると、第一に、例年に比較して高分子関係の講演が減少したことである。これは、高分子学会が同時に開催されたためであるかも知れないし、高分子の分野での熱測定、熱分析の技術的問題はあらかじめ解決したと考えられるためであるかも知れない。いずれにせよ、あと、二、三年の傾向をみなければいずれとも決められないであらう。

これに対して、特に目立ったのが、生物、生化学関係の急速な伸びである。この分野の講演は18日午後のA会場を中心に行われたが、この日だけで10件の報告が行われ、聴衆も多く参加を得た。今後大いに発展の期待される分野として見守ってゆきたいと思う。

最後に、12回討論会の開催にあたって会場のお世話から懇親会まで非常にゆきとどいた運営にあたられた、現地、名古屋大学工学部原子核工学科内藤教授をはじめ内藤研究室のみなさんに感謝の意を表したい。